皐月

〔さつき〕令和７年５月

「五月」「早月」などと書いても「さつき」と読むが、この時期に田に苗を植えることから「早苗月」とも言われ、この呼称になった。

発行：北海道神社庁一区教化委員会

人を相手にせず、天を相手にせよ

～ 大西郷遺訓 ～

今月のことば

人を相手にせず、天を相手にせよ

～ 大西郷遺訓 ～

西郷隆盛は若年以来、修養に修養を重ねた傑物であるここにいふのも敬天愛人のモットーと並んで尊いものがある。一般論としては、天を敬ひ人を愛するの方が受け入れ易い。然し人が信用できないやうな場合には、何を相手にしたらよいのか。大西郷は「天のみが最後の拠り所だ」としたのである。明治維新前後の色々の問題は、前者の敬天愛人の四字で切り抜けることが出来た。然し明治以降の難問にぶつかることが多くなったとき、人も相手に出来ない、特に征韓論に際しては、「天を相手にせよ」の境地にまで進んだと言はざるを得ない。それは正に人間最後の境地である。

世には「人事をつくして天命を待つ」といふ格言もある。隆盛の心境も正にその通りであったかもしれない。然し最後の最後の心の拠り所は、「天命」だけだったといふのである。天命とは何か。神職でいへば、「最後は神のお言葉に待つ」ことと同じである。

一般には人の言葉は、神のご意志の現はれであるとして人の言葉は聞くべきであるとされてゐる。然し絶体絶命といふ、追ひつめられたとき、人の言葉も信用出来ないといふ場合には、心の拠り所は「天命」―神の教へ神のお言葉に従う以外にない。敬天愛人をモットーにした大西郷でも、かうした覚悟は、一生のうちには一度は来るといふ実感がここにはある。

（神道百言　財団法人神道文化会編より抜粋）

季節のまつり

端午

五月五日

こどもの幸福を願って立てた鯉のぼり

五月五日は「端午の節供」といわれ、もともとは田植えを控えた時期に、心身を清め田の神様をまつる行事でした。魔除けのためにお供えする菖蒲（強い香りやとがった葉先が邪気を祓うと信じられていた）と、尚武とをかけて武者人形を飾るなど、次第に男の子の節供として広まり、「立身出世」を願って鯉のぼりを立てました。又、鯉のぼりは本来、お田植祭に神様を迎えるためのお清めが済んだ家の目印から発達したものともいわれています。

田植

稲の苗（早苗）を苗代から本田へ、村総出で共同作業

春の最も大きな行事は田植えでした。一年の稲作の始まりである田植えの前にはお祭りが行われ、家族総出、村総出で田植えが行われました。機械化が進んで田植えの風景が様変わりした今でも、各地で行われる田植え祭には昔ながらの様子が生き生きと残っています。

端午の節供の行事食

行事食とは、季節折々の伝統行事やお祝いの際にいただく特別な料理のことを言います。

それぞれ旬の食材を取り入れた物が多く、季節の風物詩の一つにもなっています。本来、年中行事は「神様を呼び、お供えを捧げる日」で「ハレの日」と呼ばれ、普段の食卓にはないご馳走を並べて、日常の「ケの日」と区別してきました。

農耕民族である日本人は、季節の変わり目に行事を行うことで収穫に感謝し、「ハレの日」というご馳走を食べる日を設けることで、身体に栄養と休息を与えてきました。行事食は体調を崩しやすい季節の変わり目を、賢く乗り切る「食の知恵」でもあります。

端午の節供には、一年目の初節供（生まれて初めての節供）に「難を避ける」という意味のある『ちまき』を、二年目からは柏の木が新しい芽が出るまで古い葉を落とさない事から「跡継ぎが絶えない」「子孫繁栄」の縁起物とされる柏の葉を二つ折りにして包んだ『柏餅』が食べられます。

なお、この「節供」ですが、現在では「節句」の表記が用いられることが多いようです。しかしながら、神様にお供えを捧げるという古来よりの考え、本来の表記では「節供」であることを忘れてはいけません。

きんげんじっちょく
謹厳実直

つつしみ深くてまじめであること。またそのさま。
まじめな人間のようす。

令和 7 年
2025年

5 月

日	月	火	水	木	金	土
《 3日　憲法記念日 》 日本国憲法の施行を記念し、国の成長を期する日です。 《 4日　みどりの日 》 自然に親しむとともにその恩恵に感謝し、豊かな心をはぐくむ日です。 《 5日　こどもの日 》 こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する日です。				1 先勝 八十八夜 三りんぼう うま	2 友引 ひつじ	3 先負 ● 憲法記念日 さる
4 仏滅 ● みどりの日 とり	5 大安 ● こどもの日 端午　立夏 いぬ	6 赤口 休日 三りんぼう る	7 先勝 ね	8 友引 うし	9 先負 とら	10 仏滅 一粒万倍日 う
11 大安 一粒万倍日 たつ	12 赤口 み	13 先勝 うま	14 友引 ひつじ	15 先負 さる	16 仏滅 とり	17 大安 いぬ
18 赤口 三りんぼう る	19 先勝 ね	20 友引 うし	21 先負 小満 とら	22 仏滅 一粒万倍日 う	23 大安 一粒万倍日 たつ	24 赤口 み
25 先勝 うま	26 友引 ひつじ	27 大安 さる	28 赤口 とり	29 先勝 いぬ	30 友引 三りんぼう る	31 先負 ね

二十四節気

【立夏　りっか】…　五日

旧暦四月巳の月の正節で、このころになると、山野に新緑が目立ちはじめ、風もさわやかになって、いよいよ夏の気配が感じられてきます。

【小満　しょうまん】…　二十一日

旧暦四月巳の月の中気で、このころは陽気盛んで、山野の植物は花を散らして実を結び、田に植える準備をはじめるなど、万物がほぼ満足する季節といえるでしょう。

六曜・選日

《六曜》
【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし
【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
【先負】…諸事静かなることによし、午後大吉
【仏滅】…万事凶、患えば長びくおそれあり
【大安】…何事をするのにも吉の日、大吉日
【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉

《選日の吉凶》
【三りんぼう】…三隣亡日、普請始め、棟上大凶日
【一粒万倍日】…出資・投資・購入、新規事業開始婚姻は吉、借りる、離別は凶

七十二候《5月》

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに3つの候に細分し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

小満

初候・蚯蚓出（みみずはじめてなく）
蚯蚓が元気に鳴きはじめるころ
次候・蚯蚓出（みみずいずる）
ミミズが地上に出てくるころ
末候・竹笋生（たけのこしょうず）
たけのこが土から出てくるころ

立夏

初候・蛙始鳴（かわずはじめてなく）
蛙が元気に鳴きはじめるころ
次候・蚯蚓出（みみずいずる）
ミミズが地上に出てくるころ
末候・竹笋生（たけのこしょうず）
たけのこが土から出てくるころ

初候・蚕起食桑（かいこおきてくわをはむ）
蚕が桑の葉をたくさん食べるころ
次候・紅花栄（べにばなさかう）
あたり一面に紅花が咲くころ
末候・麦秋至（むぎのときいたる）
麦の穂が実り始めるころ

「夏も近づく八十八夜」は、いつ？

よく知られた茶摘み歌に「夏も近づく八十八夜・・・・」という歌がありますが、八十八夜とは、立春から数えて八十八日目にあたり、現在で言えば五月一日ころになります。

実際、歌にうたわれているように、この日に摘んだ茶の葉は上等とされています。八十八夜は、まさに「夏も近づく」ということで、農村では田の苗代作りや、畑作物の種まきを始める重要な時期です。

とくに「八十八夜の別れ霜」といわれるように、霜による農作物の被害から解放されるときであり、「八十八」は漢字の「米」に通じ、末広がりの「八」が重なる縁起のよさも加わって、昔から農事の目安として欠かせない日でした。この日は、田の神に供え物をして豊作祈願をしました。

安産祈願　5月の戌（いぬ）の日

5日（月・祝）
17日（土）
29日（木）

＊戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

● 祝祭日には国旗を掲げましょう